

## 新渡戸と軍国主義

福 原 好 喜

### 目 次

- 1, 「三月事件」と新渡戸
- 2, 満州事変と新渡戸
- 3, 「満州事変ニ際シ関東軍ニ賜ハリタル勅語」
- 4, 上海事変と新渡戸
- 5, 「松山事件」と新渡戸
- 6, アメリカへ
- 7, 軍国主義の弁護

日本にとって昭和6年は激動の時代の始まりであった。本稿の意図は昭和6年以降の新渡戸稲造（1862—1933）の言動を追うことによって、晩年の新渡戸像を明確にしようとするところにある。新渡戸の晩年は苦悩の晩年であった。彼は、1933年10月15日、カナダ、バンフの太平洋会議出席の後、ヴィクトリアで客死するが、新渡戸の死は悲劇の死であった。彼は異郷の地で、はるか祖国の将来を案じながら失意のうちに世を去った。それは新渡戸個人の悲劇というよりは近代日本の悲劇と言うべきであつた。

### 1, 「三月事件」と新渡戸

1931年4月8日、新渡戸稲造は札幌農学校同期の旧友、佐藤昌介を枢密院議員に推薦すべく、旧知の内大臣牧野伸顕を訪ねた。牧野はその日の日記にこう記している。

4月8日

新渡辺〔戸〕博士来訪。佐藤昌介男枢密院云々の件なり。議会中文相へ機会あり話し試みたるに、文部より推薦すれば先づ佐藤なり、牧野伯よりも同様御話しありたりとの事なりし由。其後高岡〔熊雄〕よりも小生へ重ねて御願致し呉れとの事あり、旁々罷出たり云々。仍て右は小生も心懸け居る事なれば、今後相当の時機に心配すべし、然し他の候補者も多々ある事なれば気長、根気能く運動可然、返事し置けり。

余談にファシスト的陰謀のある事（宇垣大将を擁して）の内話あり。小生は之に対し容易に信ず可からざる次第を述べ置けり。織田万の貴族院希望の話もありたり<sup>(1)</sup>。

この時新渡戸は用件を話し終わった後で、驚くべきことを牧野に耳打ちした。彼は、この3月、宇垣一成陸軍大将を擁しての「ファシスト的陰謀」、軍事クーデター事件のあったことを牧野に告げたのである。牧野には容易に信じられないことであった。世に言う「三月事件」とは、陸軍の建川美次参謀本部第二部長、小磯国昭軍務局長らが中心となり、軍事クーデターによって、宇垣軍部内閣を実現、国家改造を図ろうとするものであった。実行の中心は桜会の橋本欣五郎中佐や右翼の大川周明らであった。計画が事前に発覚したため未遂に終わったが、当時真相は闇から闇に葬られ、首謀者に対する処罰は一切行なわれなかった。国民は事件の存在さえ知らされなかった。しかし、新渡戸は宮中の牧野さえ知らないことを事件の直後に既に知っていた。新渡戸は1929年4月1日から『大阪毎日』『東京日日』の編集顧問を委嘱されており、両紙の編集・校閲に当たっていた。これら二つのいずれかのルートで彼は事件の情報を得たものと思われる。しかし当時、両紙共これをニュースにすることはなかった。

前年の11月14日、ロンドン海軍軍縮会議にからむ統帥権干犯問題で、浜口雄幸首相が東京駅で右翼に狙撃される事件が起こっており、このクーデター計画を知った時、新渡戸の心は不吉な時代の始まりを予感したに違いない。

浜口首相狙撃事件の時、新渡戸は『英文大阪毎日』12月19日の Editorial Jottings 編集余録に次のように述べている。

152 わが国のために

30・12・19

この昭和の文明の時代において、われわれの間に——しかも帝国の首都に——テロリストが横行し、愛国の名において、卑劣な欺瞞と卑怯な行動をほしいままにすると、信じられぬように思われる。凶悪きわまりない悪行が、愛国という聖なる名の下で、行なわれるということはあってはならない。

捕まった泥棒は勝ちほこってわめく——「おれは社会正義のために、金持ちから取って貧乏人を助けるのだ。」——そのくせ、しじゅう盗んだ金を自分だけに使うのだ、まるで自分だけで社会を構成しているように。殺人犯は誇らかに叫ぶ——「おれがあいつを殺したのは、あいつが国の為にならないからだ。」——ここでもまた、国とは彼自身のことにほかならない。

いわゆる愛国より以上の高い教えを知らぬ連中こそ、まさしく国の名を汚し、国を裏切る者どもである<sup>(2)</sup>。

新渡戸にとって愛国を唱える暴力は、結局自分のために行動しているのであって、テロリストやファシストは「国を裏切る者」にほかならなかった。新渡戸の考える愛国は、右翼やテロリストやファシストの唱える「愛国」とは決定的に違っていた。彼は言う。「己が国を愛する人は、その罪や欠点すらも愛するであろうが、それにひきかえ、己が国を悲しむ(ウレイ)人は、その罪と欠点のゆえに憂うる<sup>(3)</sup>。」新渡戸は愛国の人というより憂国の人であった。

## 2, 満州事変と新渡戸

1931年9月18日、関東軍高級参謀大佐板垣征四郎、作戦主任参謀石原莞爾らは、奉天独立守備隊中尉河本末広に命じ、張学良軍の拠点、北大營南方の柳条溝で満鉄線を爆破させた。「柳条溝事件」すなわち満州事変の始まりである。柳条溝事件は板垣と石原の二人の謀略によるものであるが、関東軍翼下の独立守備隊と第2師団歩兵第29連隊は、現地中国軍の満鉄への攻撃とみなして、直ちに軍事行動に移った。関東軍はその日のうちに長春、奉天などを占領した。この時も新渡戸の情報網は正確であった。彼は事件の翌日9月19日の編集余録に次のように書いている。

316 悪い舌

31・9・19

個人であれ国家であれ、宣伝すなわち口先の言葉によって、正しい事を誤りと証明し、誤りを正しいと証明することができると思うなら、それは大まちがいである。

宣伝はしばしば、黒をしばらく白と見えさせる力をもっていることが多い。しかし、現実と真実は断固たる真理であって、これは、雄弁によってどれほど損われあいまいにされようと、どんな言葉も永遠にこれを変えることはできない。

子供じみたごまかしにふけて、市民も政府も、相手を悪業悪意ありと非難攻撃している。どちらの側も、ウサンくさい証人を呼び出し、どちらも熱烈な口調をつかっている。こういう場合、偽りを語る一枚の舌は、何百万もの人々の心に毒を注ぎ、彼らを破滅の渦巻に投げこむこととなる。

宣伝が愛国心の是認をうけると、虚偽は白昼堂々とまかり通り、大嘘つきであればあるほど、尊敬されることとなる。

忘れぬようにしよう——不十分な根拠をもとに、また偽りの口実をもうけて始められた戦争は少なくないことを。こんな戦争で勝利をえても、そ

の勝利は、征服する国家の歴史のページに永久に墨をぬるのだ。

偽りと殺戮によって大成長をとげ、歴史の法廷で有罪宣告をうけた国があるではないか、あたかも、征服され卑しめられつつ、世界の評価を高めている国家があるのと同様に<sup>(4)</sup>。

新渡戸が、柳条溝で起こった満鉄爆破事件と、それに呼応して出撃した関東軍の動きを、どの程度詳細に把握していたか知る術はないが、彼は少なくとも当時この戦争を「不十分な根拠をもとに、また偽りの口実をもうけて始められた戦争」であると認識していた。その5日後9月24日の編集余録では彼は次のように述べている。

320 ひいきをする

31・9・24

どんなに勇敢な行ないでも、正しくなければ賞めるべきではない。敏速この上ない行動でも、正義をその基礎としていないなら、単なる軽業にすぎない。

国家間の交渉にあつては、ずるいごまかしがどんなにもっともらしく行なわれても、また武力誇示がどんなに恐るべきものであつても、それはただ一つの問題をすらすら、永久に落着させることはできない。それは将来の紛糾の種をまいているだけである<sup>(5)</sup>。

新聞が、関東軍の勇敢で敏速な行動を称揚する中で、新渡戸の目は冷めていた。彼は関東軍の行動が「正義をその基礎としていない」「ずるいごまかし」であると見ていた。それは問題を解決するどころか「紛糾の種をまいているだけ」である。そして5日後の29日の編集余録「兵士以外の愛国者」で、日本は「腕だけあつて頭のない身体のような」怪物であるとして、軍国主義日本を皮肉っている。

324 兵士以外の愛国者

31・9・29

忠義も愛国も兵士の独占物ではない。それが平時において、国事を導くに不当な影響力を振うようになると、その国には災いが訪れる *Woe betide the nation*。国の主な支柱が軍隊であり、その最大の栄光が軍力であるような国は、不安定で危なっかしいものである。そんな国は、腕だけあって頭のない身体のようなものである<sup>(6)</sup>。

新渡戸は日本の将来を心配していた。彼の目は関東軍の専横によって軍国主義化の途を突き進む日本を見ていた。彼にはそれが「不安定で危なっかしいもの」に見えた。忠義と愛国の国日本は実は「腕だけあって頭のない身体のような」存在だった。

昭和天皇は当初、朝鮮軍2個師団の満州派遣を認めなかった。若槻首相は参内して派遣是非の問題としてではなく、朝鮮軍出兵の経費支出の問題として裁可を上奏した。天皇は「事態を拡大せぬという政府の決定した方針は至極妥当と思うから、その趣旨を徹底するよう努力せよ」との条件をつけて上奏を裁可した。若槻内閣は「事態を拡大せしめざることに極力努むるの方針」を決定し、9月24日「満州事変に関する政府第一次声明」を出して、日本が満州に領土的欲望を持たず、軍事占領はせず、「満鉄に対する側面よりの脅威を除」けば撤兵すると約束した。国際連盟理事会は、当初、日本政府の弁明ないし声明を了承し、問題解決を日中両国に要望して、日本に対して宥和的であった。しかし日本政府の不拡大方針に反して、関東軍は10月8日には張学良政府の錦州を爆撃するなど、軍事侵略を一層進めた。政府は現地軍をコントロールすることが出来なかった。

新渡戸は10月9日、上海太平洋会議に出席するため神戸港を後にする。松葉杖を使い看護婦同伴であった。彼が日本を留守にした1ヶ月の間に、彼の母国は軍国主義への歩みを一層速める。

1931年10月、「三月事件」を起こした桜会は、事変の拡大を目指して、

## 新渡戸と軍国主義（福原）

10月24日軍事クーデターによって首相官邸を急襲し、首相、閣僚を殺害、荒木貞夫中将を首班兼陸相とする内閣の実現を計画した。世に言う「十月事件」である。計画は未遂に終わったが、事件の影響は大きく、これによって若槻内閣は崩壊、不拡大方針を基調とする幣原外交に終止符が打たれた。12月13日新たに成立した犬養内閣は、荒木貞夫が陸相となり、満州事変に積極的に対応するようになる。一万余の関東軍に引きずられて日本は、軍国主義の途をひた走ることになる。

「独立新満蒙国家」建設を目指す関東軍は、11月19日、黒竜江省の省都チチハルを占領、12月28日には錦州に進撃を開始、翌年1月3日にはこれを占領下に置いた。これで東3省は関東軍によって制圧された。これを見たアメリカ国務長官スチムソンは1月7日、「1928年、8月27日結ばれたパリ条約（不戦条約）の義務に違反する手段によってもたらされたいかなる状況も、条約も、協定も一切承認しない」というスチムソン通告を日中両国に手交した。

若槻内閣が総辞職し、12月13日犬養毅に大命が降下された。その折、昭和天皇は元老西園寺公望に次のように述べた。

今日のような軍部の不統制ならびに横暴——要するに軍部が国政、外交に立ち入ってかくの如きまでに押し通すということは、国家のために頗る憂慮すべき事態である。自分は頗る深憂に堪えない。この自分の心配を心して、お前から充分犬養に含ましておいてくれ。その上で自分は犬養を呼ぼう<sup>(7)</sup>。

この時までの昭和天皇は、軍部の暴走を心から憂慮し、満州での事態の不拡大に心を砕く「平和天皇」であった。軍部の横暴を厳しく見詰める新渡戸稲造と天皇との間には、その考え方において大きな懸隔はなかった。

### 3、「満州事変ニ際シ関東軍ニ賜ハリタル勅語」

しかし年が明け、1月8日、スチムソンドクトリンの発せられた翌日、天皇が関東軍に与えた「満州事変ニ際シ関東軍ニ賜ハリタル勅語」は以下のようなものだった。

#### 「満州事変ニ際シ関東軍ニ賜ハリタル勅語」

さき 曩ニ まんしゅう 満州ニ おひ 於テ じへん 事変ノ ほつぱつ 勃発スルヤ じえい 自衛ノ ひつようじやう 必要上 くわんとうぐん 関東軍ノ しやうへい 将兵  
くわだんしんそく ハ果斷神速 くわよ 寡ク しゆう 衆ヲ せい 制シ すみやか 速ニ これ 之ヲ さんたう 艾討セリ じらい 爾來 かんく 艱苦ヲ しの 凌キ  
きかん 祁寒ニ た 堪ヘ かくち 各地ニ ほうき 烽起セル ひぞく 匪賊ヲ さうたう 掃蕩シ よ 克ク けいび 警備ノ にん 任ヲ ま 完ウシ あるひ 或ハ  
のんかう 嫩江 ち 齊々 は 哈爾 ちほう 地方ニ あるひ 或ハ れうせい 遼西 きんしうちほう 錦州地方ニ ひようせつ 氷雪ヲ つ 衝キ ゆうせんりきどう 勇戦力闘 もつ 以  
そ テ くわこん 其ノ ぬ 禍根ヲ くわうぐん 拔キテ あぶ 皇軍ノ ちゆうがい 威武ヲ せんやう 中外ニ ちんふか 宣揚セリ そ 朕深ク ちゆうれつ 其ノ よみ 忠烈ヲ な 嘉  
なんぢしやうへい ス な 汝將兵 ますますけん 益々堅忍自重 にんじちやうもつ 以テ とうやうへい 東洋平和ノ き 基礎ヲ ちん 確立シ しんい 朕カ こた 信倚ニ な 対ヘ  
ムコトヲ き 期セヨ (8)

この4週間にも満たない短い期間の間に、天皇の考え方の上に何が起きたのか定かでないが、天皇の関東軍についての認識は180度の転換がなされていた。「勅語」では、あの統帥権干犯という罪を犯して、満州で謀略によって侵略を開始した関東軍は、「自衛ノ必要上」「匪賊ヲ掃蕩シ」「警備ノ任ヲ完ウシ」た皇軍となり、チチハル、錦州等の占領は「皇軍ノ威武ヲ中外ニ宣揚」したものとなった。天皇自ら「朕深ク其ノ忠烈ヲ嘉ス」ことによって、関東軍は天皇麾下の最も忠実な軍隊となった。この「勅語」は天皇が満州での関東軍の謀略、侵略行為を承認し、いやそればかりでなく、その侵略行為自体を「皇軍ノ威武ヲ中外ニ宣揚」する行為として嘉賞したものであった。この時点で昭和天皇は、その後幾度か世界平和を口にしながらも、歴史上日本軍国主義の主導者としての役割を担うことになる。天皇のお墨付きをえて関東軍中樞が、その侵略行為に一層の自信を深め勇を鼓したことは言うまでもない。この時以降、日本人は誰であれ、大陸での関東軍の侵略行為を批判



することは許されざることとなった。犬養の陸軍軍紀回復の試みは立往生することになる。「勅語」が発せられて4日後の1月12日、新渡戸は編集余録に次のような文章をのせる。新渡戸も又「回れ右」をせざるを得なかった。

361 満州での出来事の教訓

32・1・12

満州での軍事作戦がやむとともに——そしてその終了を心から望むものだが——日本にとっては、責任の重かつ大なる時代が始まる。

その地点に駐屯しているわが軍は、確かに迅速かつ勇敢に行動して、他の国々の賞讃を博し、国民の感謝と尊敬を得たのであった。しかし、その機敏そのものによって、世界の疑惑をかきたててしまったので、わが軍の取った行動の必要かつ正しかったことを世界に判ってもらうには、長年かかることであろう。

かりに日本が平和愛好国としての評判を失うことがあるとしても、世界は、中国の人間としてまた国としての根本的弱体への洞察を得たのである。

中国についていえば——宣伝そのものが事実に基づかねばならぬゆえ、どんなに大声を立て耳をつんざく叫びをあげても、不正を正とすることはなく、ないことに気づくであろう。そして、自尊心のある国は、自分に代わって戦ってくれるよう他国に頼るわけにはいかぬことを悟るであろう。

水は分かれた。新しい水を引こう。もし中国と日本とが、同じ井戸で一緒に水を汲むとすれば、久しく沙漠としてさげすまれてきた全東洋を、バラのように花咲かせることができるのである<sup>(9)</sup>。

ここでは天皇の「勅語」の意を体して、「その地点（満州）に駐屯しているわが軍（関東軍）は、迅速かつ勇敢に行動して、他の国々の賞讃を博し、国民の感謝を得た」（即ち「皇軍ノ威武ヲ中外ニ宣揚セリ」）のであった。そして「わが国のとった行動」は「必要かつ正しかった」ことになった。満州事変勃発時点での、この戦争についての新渡戸の認識は、この戦争は「偽りの

口実をもうけて始められた」,「正義をその基礎としていない」戦争であった。しかしこの4ヶ月余り後に、新渡戸はその「事変」についての認識を大きく変えることになった。天皇の忠実な臣、新渡戸稲造は、天皇の意志に背くことは出来なかった。それは平和主義と愛国という二つの魂を内に抱いた新渡戸の苦悩と矛盾の始まりであった。この後新渡戸の言動は、覆うことの出来ない大きな矛盾の間を行き来することになる。

#### 4、上海事変と新渡戸

1932年1月18日午後4時頃、上海の日本山妙法寺僧侶水上秀雄と信者4人が勤行中に、中国のタオル工場三友実業前で、数十人の中国人に襲撃されるという事件が起こった。5人のうち3人が重傷を負い、僧侶水上秀雄は24日に死亡した。復讐のため居留民・青年同志会員30人が、20日午前3時頃、日本刀で武装し三友実業を襲い、放火した上中国人巡捕一人を斬殺、数名に重傷を負わせた。日本側も一人が射殺され、二人が重傷を負った。21日犬養首相は衆院の解散を行なった。そしてその翌日、政府は兵力増強を決定、28日までに巡洋艦2隻、特務艦1隻、駆逐艦12隻、陸戦隊925人を上海に送った。又上海の村井総領事は呉上海市長に、僧侶襲撃事件に関連して、「上海市長の陳謝」、「加害者の処罰」、「被害者の補償」、「抗日団体の解散」等の要求を提出した。要求が入れない場合は帝国の権益擁護のため「適当と信ずる手段」とるとの声明を発表した。28日午後3時、呉市長は、抗日団体の解散を含め、日本側の要求全部を承認する旨の回答を届けた。しかし塩沢第1遣外艦隊司令官は、午後8時、戒厳令施行により租界の警備に当たるとの布告を出し、午後11時20分、陸戦隊に出動命令を出した。同40分、装甲車を先頭に警備出動が開始された。そして中国の第19路軍の警備線内に重装備した陸戦隊が警告なしに突入、日中両軍の戦闘が開始され、激しい市街戦となっていた。翌29日、日本政府は「上海事件に関する政府声明」を発表、上海での抗日・排日運動が激化したため、日本人居留民の生命財産その他の権益を唯一の目的として、今回の海軍の行動となったので

あり、「上海に対し何ら政治的野心は有していない」と述べた。

新渡戸は上海事変の直後の2月4日、講演のため松山を訪れ、道後温泉の鮎屋旅館の一室で地元新聞記者を前に次のように語った。それはオフレコという条件で、であった。しかし翌日その内容は『海南新聞』に大きく報道され、新渡戸自身を大変苦しい立場におとし入れることとなった。世に「松山舌禍事件」といわれる事件の発端である。

「近頃、毎朝起きて新聞をみると、思わず暗い気持ちになってしまう。わが国を滅ぼすものは共産党か軍閥である。そのどちらが恐いかと問われたら、今では軍閥と答えねばなるまい。軍閥が極度に軍国主義を発揮すると、それにつれて共産党はその反動でますます勢いを増すだろう。共産主義思想はこのままでは漸次ひろがるであろう」

「国際連盟が認識不足だということか？ だが、いったい誰が国際連盟を認識不足にしたのか？ 国際連盟の認識不足ということは、連盟本部が遠く離れているのだから、それはあるだろう。

しかし、日本としては当然、国際連盟に充分認識せしめる手段を講ずべきではなかったか？ 上海事件に関する当局の声明はすべて三百代言的というほかはない。私は、満州事変については、われらの態度は当然のことと思う。しかし、上海事件に対しては正当防衛とは申しかねる。支那がまず発砲したということか？ だから、三百代言としか思えぬというのだ<sup>(10)</sup>」

この新渡戸発言の要旨は「満州事変については、われらの態度（即ち関東軍の行動）は当然のこと」であるが、「上海事件に対しては正当防衛とは申しかねる」、そして「上海事件に関する当局の声明はすべて三百代言的というほかはない」という点である。

実は従来の新渡戸稲造研究史の中では、この新渡戸発言の真の意味と、何故新渡戸がそのような発言をするに至ったかについての脈絡がつかまれてい

ないように思う<sup>(11)</sup>。そしてその結果、新渡戸稲造の眞の姿が見えて来ない。まず満州事変について、「われらの態度は当然のことと思う」という発言についてであるが、前に見た通り、新渡戸は31年9月18日満州事変が起こった時点では、満州事変は「偽りの口実をもうけて始められた戦争」であり、関東軍の行動は「敏速この上ない行動でも、正義をその基礎としていない」「単なる軽業」か「ずるいごまかし」にすぎないと見ていた。彼の目は、この時点では、事態を正確に見ていた。しかし32年1月8日、昭和天皇が「満州事変ニ際シ関東軍ニ賜ハリタル勅語」で関東軍の謀略と侵略行為を「皇軍ノ威武ヲ中外ニ宣揚セリ」と賞讃した直後の1月12日には、新渡戸は「わが軍（関東軍）は迅速かつ勇敢に行動して、他の国から賞讃を博し、国民の感謝と尊敬を得た」とその考え方を180度変えたのであった。天皇に信を置く日本国民は天皇の「勅語」を信じた。新渡戸とて例外ではなかった。2月4日松山での「満州事変についてのわれらの（関東軍の）態度は当然のことと思う」という新渡戸の発言は、この脈絡の上で考えられるべき発言である。臣新渡戸としては前言を翻してでも、そう言わざるを得ない事情があった。

しかし上海事件についてはどうであろうか？ 彼は「上海事件に関する当局の声明はすべて三百代言的」であり、「上海事件に対しては正当防衛とは申しかねる」と上海事件の本質をこの時点で正確に見抜いている。実は上海事変は前にも少し詳しく述べたような経過を辿って拡大していったのであるが、実は上海事変の発端となった僧侶、信者殺傷事件は、当時上海にいた公使館付武官補田中隆吉少佐が、無頼中国人を雇って日本人僧侶を襲撃させたものであった。彼は太平洋戦争終了後みずからそう証言した。満州から列国の関心をそらすため、上海で事を起こすように関東軍板垣征四郎参謀より依頼を受けたというのである。また三友実業社襲撃も彼が重藤千春憲兵大尉に指揮させて行なわせたものであった。上海事変も、満州事変と同じく、関東軍の謀略によって始まった。しかしその眞実が明らかになったのは戦後になってからであり、上海事変勃発当時は、当事者を除いてすべての国民が、中国人による日本人襲撃が原因であると信じていた。そういう中での新渡戸の

発言の意味を考えるべきである。言うなれば、当時居留民や国民だけでなく政府も出先総領事も軍司令官も、完全に関東軍の謀略にのせられてしまっていた。その中で一人新渡戸稲造だけが事件の真実を見抜いていた。彼は言う。「支那がまず発砲したというのか？ だから、三百代言的としか思えぬというのだ。」彼の炯眼はこの時事件の謀略性を見抜いていた。彼から見れば政府の声明は単なる詭弁にすぎなかった。しかしそれは単なる詭弁と言ってすませられる筋のものではなかった。それは巧妙に仕組まれた関東軍参謀、板垣征四郎の日本を軍国主義へ引きずり込む陰謀と謀略のシナリオだった。政府も軍部も新聞も、そして国民も、新渡戸を除いたすべての人々がその謀略を見抜けなかった。松山事件は「口は禍いの元」というような舌禍事件ではなかった。新渡戸が、ガリレオの如く、真実を語ったがために生じた事件であった。

## 5、「松山事件」と渡米決意

新渡戸が「松山事件」によって苦しめられ、暗澹たる日々を送っていた1ヶ月余りの間に、日本社会は内外で激動の時代に入っていった。上海では日中両軍の激戦が続き、国内では民政党総裁井上準之助が2月9日、血盟団5人組の一人小沼正によって射殺された。井上は新渡戸が理事長を務める太平洋問題調査会の前任者であった。3月1日には関東軍指導の下に満州国政府の建国宣言が発せられ、同9日には宣統帝溥儀を執政に推戴して、満州国建国式と就任式が行なわれた。そして3月4日朝には三井本館前で三井財閥の総帥団琢磨が血盟団の菱沼五郎によって射殺された。時代はテロリズムとファシズムの時代に入っていた。新渡戸邸にも刺客が押し入り、危険が新渡戸の身に及ぶようになる。

新渡戸の松山での発言が地元の『海南新聞』で報じられ、大きな社会的事件として人々の耳目を引くようになってきた2月27日、東京小石川の新渡戸邸を海軍次官左近司政三と陸軍省軍事課長永田鉄山が訪れた。二人は「松山講演」の件について新渡戸と懇談した。懇談後、左近司政三は次のような

「左近司次官談話」を発表した。

「新渡戸博士が過日、愛媛県下で新聞記者と会見の際にわが軍部を誹謗（ひぼう）する内容の新聞記事が一部の新聞に掲載せられて、世間の問題となり、糾弾運動を起こすというような風評が伝えらるるに至った。僕がかねてから博士のごとき欧米人筋と交際の厚き紳士に事態の真相を承知しておいてもらって国家のために大いに努力していただきたいと考えていたので満州問題、上海事件などのいきさつを説明かたがた陸軍省の永田大佐とともに博士を訪問した。しかるところ博士は右会見談として伝えられる新聞記事が全然博士自身の意思と異なるにかかわらず、世間の一部に博士の真意を誤解するものあるを心外とし、細かく当時の論旨について説明された。

なお、この時局問題に対して博士が従来海外に向って公表された意見の内容も承知し、兩人（左近司、永田）も釈然として博士の心情を了とし、重ねて国家のために一段と尽力ありたき旨、申し述べて引き取った<sup>(12)</sup>。」

この時、左近司、永田の二人は新渡戸に満州問題、上海事件のいきさつを説明し、「重ねて国家のために一段と尽力ありたき旨」を要請した。兩人のおだやかな要請に新渡戸は「ノー」とは言えなかった。この懇談の二日後の2月29日、新渡戸は松山講演の折、世話になった旧知の森恒太郎に次のような礼状を出している。

拝啓 陳者先般御地へ出張致候節は久々にて御目にかかり誠に愉快を覚居候 御不自由なる御身を以て公事に御努力あらせらるゝ御様子を拝し感慨無量に有之候 扱て御地旅館に於て新聞記者に談話せる事柄より世——（寧ろ憲兵方面）の曲解を引起し貴兄にまでも御迷惑をかけ候由誠に御気の毒に存じ候 右事件に関して貴兄よりも縷々釈明被下たる由は大毎紙上により承知致候 幸ひ此地の当局者殊に陸海両大臣は篤と小生の意を諒解をせる由目下の一大要務は外国の誤解を解く事に有之候へ共これこそ小生の

新渡戸と軍国主義（福原）

日頃努力せる事とて今後一層其の任に奮發致度存候

右御礼まで

草々

猶ほ菅氏より御聞とり願上候

二月二十九日

森大兄

新渡戸稲造<sup>(13)</sup>

手紙の中では「目下の一大要務は外国の誤解を解く事に有之候」と述べられている。新渡戸は左近司、永田との懇談の折、二人に対して、満州問題、上海事件について「外国の誤解を解く事」に努力する旨の約束をしたものと推測される。「今後一層其の任に奮發致度存候」とは二人に約束した内容を友人に披瀝したものと思われる。この手紙を書いた時点で新渡戸は、この事件はこれで落着するもの、と考えていた。が、そうはいかなかった<sup>(14)</sup>。

その経過は割愛するが、事件が一応の落着を見た3月22日、新渡戸は山形県赤湯温泉東雲寺佐藤法亮尼あてに次のような手紙を認めた。法亮尼は年令や身分や男女を超えた新渡戸の心を許した友人であった。

—前略— 先般一身に関する危険有之との御警戒を賜り有難く存じ候

警視庁に於ても不少心配され毎日入院せる病院と小石川の留守宅に私服の刑事係の役人を詰めさせ、小生生れて初めて大切なる要人の如き取扱ひを得候

今日も猶ほ一名の巡查見張り外出の節は、同行致し呉候 小生もかねての心懸有之候はば相当の覚悟は有之候 お笑ひ迄に左に拙作お眼にかけ候

折らば折れ折れし梅ケ枝折れてこそ

花に色香をいとど添ふらん

古への目ざめし人の跡見れば

踏みにし道は紅に染む

昔よりかかるためしのあると聞く

何か惜しまん老いの此の身を

我とても親が子なれば物音に

みださざるべし心一つを

お笑い草はさて置き、御耳に達し置き度の義之有候 余儀も無之候が曾て貴姉が今夏、使命を帯びて海外に派遣せらるるならんとの御知らせ有之候通り、近々米国に行くべき相談を受け候 政府よりも命令ある様に相談有之候へ共、小生は政府よりの派遣を望み申さず、私人の資格にて事に当たり度く存候 尤も斯くなしては世俗的名誉は難得候へ共、行先に於て働くには却って自由と存候 都合よくば来月中旬家内同伴出發致し度存候 何分現今米国に於ける対日思想は、悪化を極め候事なれば、暗夜に飛込む如き心地致候へ共是又奉国の一念以外の他意なく

国を思ひ世を憂ふればこそ何事も

忍ぶ心は神は知るらん

昭和七年三月廿二日

新渡戸稲造<sup>(15)</sup>

新渡戸が詠んだ数首の歌には、彼の身にも生命にかかわる危険が及んでおり、彼自身この時点で死を覚悟していたことが分かる。手紙の中で彼が「近々米国に行くべき相談を受け候 政府より命令ある様に相談有之候へ共小生は政府よりの派遣を望み申さず 私人の資格にて事にあたり度存候」と記しているように、新渡戸のアメリカ行きは当初、政府の命令で行くよう相談があったが、新渡戸はこれを嫌って、私人の資格で出掛けることを決意したことが伺える<sup>(16)</sup>。彼は言う。

「奉国の一念以外の他意なく

国を思ひ世を憂ふればこそ何事も

忍ぶ心は神は知るらん」

しかし彼が「奉国の一念」で仕え、弁護しようとする母国は、満州事変、上海事変を通して、関東軍主導により軍国主義への途を辿り始めた軍部独裁国家であった。成功の可能性は極めて低い。しかも本当は彼が嫌う軍国主義



の弁護という仕事に彼の気持は暗かった。新渡戸は「松山事件」の渦中で、「排日移民法が撤回されるまではアメリカの土を踏まず」と言って、1924年の排日移民法以来断って来たアメリカ行きを自ら決断する。しかしそれは強い軍部と軍国主義に迎合する世論の圧力に背押されての苦渋の選択であった。これ以降、新渡戸の中では、自由主義者新渡戸は黙して、「奉国の一念」を持った愛国者新渡戸が語り始めることになる。この事件以降、彼の発言は、軍国主義日本のバイアスのかかった、いわば「奴隷の言葉」で語られることになる。この時、新渡戸の魂は大きな矛盾によって「引き裂かれて」いた。

## 6、アメリカへ

「松山事件」が一応の着落を見た1932年4月14日、新渡戸は妻のマリーと共にアメリカに向け横浜港を後にした。大勢の見送り客の中に、元外務大臣幣原喜重郎の姿もあった。国際協調、経済外交、内政不干渉を掲げる幣原外交の時代は既に終わっていたが、幣原は新渡戸のアメリカ説得の試みに一縷の望みを託したものと思われる。新渡戸稲造は4月27日サンフランシスコ港に到着するが、その翌日と翌々日「アメリカで学びつつあること」（1932年4月14日から33年の3月24日まで編集余録はこう名前が変わる）に盲人の話を二題のせる。太平洋上の二週間の旅の間中、彼の頭を離れなかったのは日本のこと、就中自分の本心を語ったが為に、生まれて始めて公衆の面前で自らの非を陳謝しなければならなかった「松山事件」のことであった。軍国主義の指導者達とそれに迎合する国民を前にして、自分はいったい今後どうしたら良いのか？ 満州事変や上海事変についての自分の認識はほぼ間違っていない。しかし自分の良心に従って抗うべきなのか、それとも不本意でも道を譲るべきなのか？ 二週間の船の上での苦悩の末、アメリカ大陸を目の前にして新渡戸は自分の気持に整理をつけたのだった。「嵐が過ぎるのを待とう」、彼はそう心に決めた。

428 眼の見える人たちには盲人に道をゆずらせよう

32・4・28

盲人が盲人の手引きをすれば二人とも溝に落ちると言われてきた。カーライルは盲人に、じっと座っているがよいと忠告した。

厄介なのは、盲人は——指導者も導かれる者も——自分が盲であることをふつう知らないことである。たいてい彼らは、眼の見える同胞よりもっと良く見えるつもりでいる。だから、じっと座っているどころか、彼らは動き、歩き、走るのである。忠告には耳をかさない。

カーライルは、盲人にぶつからぬよう、眼明きの方に忠告をすべきであったろう。

眼に見える人たちに、盲人に道をゆずらせよう。そうすれば盲人達が溝に落ちても、眼の見える人が盲人を溝から引き上げて、それから三者（盲人と眼明きのこと、原文はall—福原）は静かに安全に歩いていける<sup>(17)</sup>。

新渡戸から見れば現下の日本の状態は「盲人が盲人の手を引いている」状態であった。そして厄介なのは二人共、手を引く方も引かれる方も——即ち国家指導者も国民も——自分達が盲人であることを自覚していないことである。彼らは興奮していて眼明きの忠告に耳を貸さない。その場合、眼明きはどうすべきなのか？ 盲人達に溝に落ちないように忠告すべきなのか？ 新渡戸の結論はそうではなく、「眼の見える人たちに、盲人に道をゆずらせよう」というものであった。それは盲人達と衝突して一緒に溝に落ちるよりも良い。何故なら、盲人達が溝に落ちても、眼明きはその後盲人達を溝から助け上げることが出来るから。そしてその後盲人達は失敗に懲りておとなしくなるであろう。そうなった時点で盲人達も眼明きも、すべての人（三者）が静かに安全に歩いていける。新渡戸はそう考えた。新渡戸は日本の二人の盲人を説得すること、盲人と衝突することを断念した。「盲人に道をゆずる」ことを心に決めたのである。

429 盲目の指導者たち

32・4・29

盲目の指導者たちが、自分についてくる人々を誤り導くのに使う方法は、一つだけではない。しばしば使われる最も非人間的な方法は、見える人たちの眼をえぐり出すことである。当然これは最も痛みのはげしいやり方であるが、盲目の指導者たちは、自分ではそれが見えないものだから、良心の痛みを覚えないのである。

もっと一般に使われる緩い方法は、服従に嫌気を示す人たちに目隠しをすることである。この目的のためには、被害者の気質に応じて、いろんな種類の材料が選ばれる。柔かな絹のガーゼが好きな人もあれば、どっしりした刺繍のある錦織が好きな人もいる。硬いボール紙ならすすんで目隠しされてもよい人も多いようだ。空虚な命令の音が好きだったり、あるいは追従の言葉が好きなために、視覚を喜んで犠牲にする人たちも少なくない<sup>(18)</sup>。

このことにこだわる気持が強かったためであろう。新渡戸はそのあくる日も盲目の指導者と盲目の追従者（followers 国民のこと—福原）について書いている。盲目の指導者が追従者達に使う最も非人間的な方法は「見える人たちの眼をえぐり出すこと」である。当然このやり方は痛みを伴う。しかし盲目の指導者たちは、自分ではそれが見えないので、良心の痛みに苛まれることはない。折しも日本ではこの日の前日、4月28日、東京地方裁判所は河上肇に治安維持法違反の認定を下した。彼はこの記事を書きながら盲目の指導者として誰を頭に思い描いたのだろうか。陸軍大臣や海軍大臣か、あるいは「松山事件」の折、訪問を受けた左近司政三次官や永田鉄山軍事課長だったのだろうか。いずれにしてもそれは日本を軍国主義へと導く日本のリーダー達であった。新渡戸は軍国主義の指導者によって、他の自由主義者達のように、「眼をえぐり出」されはしなかったけれど、その口は大きく歪められその心は深く傷つけられていた。

今回のアメリカ説得の旅は新渡戸にとっていかにも気の進まない旅であった。自分で決めたとはいえ、むしろ煮え湯を飲まされるような苦渋の選択であった。そして説得の試みが成功する可能性は万に一つもなかった。自分の厭うことを、しかも可能性ゼロの試みをあえてしなければならない自らの境遇に、新渡戸の心中は暗澹たるものだった。「心はうち沈み、その任務を放棄したい気になっていた」時、オキナ（編集余録に登場する新渡戸の年上の友人。想像上の人物）が言った。「行け、汝の内なる光を頼りに」。その時の想いを新渡戸は5月1日の「アメリカで学びつつあること」に次のように記している。

#### 431 旅行者を元気づける忠告

32・5・1

あまり気乗りしない旅行に出発する前の晩に、私は、別れを告げにオキナを訪ねた。私の旅の平安を願って、オキナは言った——「およそ五十年前、私は非常に苦しい使命を帯びて遣わされたのだ。私の訪ねるべき国は、全く暗黒と見えた。私はいわば眼をこらして、私を導き慰めるべき光を探した。一条の光線も見つからないので、私の心はうち沈み、その任務を放棄したい気になった。そのとき、一つの声が私の内で叫んだのだ——行け、汝の内なる光を頼りに。私は大いに勇気づけられた思いがした。というのも、私の心中、利欲や野心は一かけらも宿していなかったからだ。私は自分に言うことができた、「私の心は清いだから、私の力は十人力同様だ」と。

私はオキナの教訓にみちた話を有難く思った、この話は、どの旅行者をも、旅立ちに当たって元気づけるであろうから<sup>(19)</sup>。

今回の新渡戸のアメリカ訪問は、何時ものように新渡戸が考え抜いた末に下した理性的決断ではなかった。周囲の事情から止むをえず下した決断であった。彼の心はいかにも気乗りしなかった。しかし彼は今回の説得旅行は自

## 新渡戸と軍国主義（福原）

分の私利私欲のために行くのではない、自分の愛する日本のために行くのであると考え、自らを鼓舞したのだった。しかし自分の良心の命令に従って行くのではなく、軍国主義日本の弁護のために行く。心の整理はつけたけれども、新渡戸の心は暗く大きな矛盾に打ち沈んでいた。

新渡戸がアメリカに上陸してからそう日のたない1932年5月15日、海軍中尉古賀清志、同三上卓らが首相官邸を襲撃、犬養毅首相を射殺した。軍事クーデターである。古賀らは荒木貞夫陸相の政権樹立を目指していた。「わが国を滅ぼすものは共産党か軍閥……今では軍閥」と考えていた新渡戸にとっても、驚天動地のことだったに違いない。事件のショックの未だ冷めやらぬ6月1日、新渡戸は出淵駐米大使と共にホワイトハウスのフーバー大統領を訪れた。大統領は、日本の暗殺事件に「仰天した」と告げた後に新渡戸に暗い顔でこう聞いた。

「犬養首相の死によって、あなたがたのお国は、国内・国際政治の堪能で有能な公僕の一人を失われたのです。あなたたちの指導的思想家は、将来お国をどうするおつもりなののでしょうか<sup>(20)</sup>。」

新渡戸とて、こんな重大な質問に簡単に答えられる訳もなかった。彼はとっさに大統領に、

「暗殺は憎むべきことだが、日本には亡くなった指導者たちが残した仕事を実行できる人がないわけではない」そして「日本が、国内的にも対外的にも、非常に急激な変化をこうむることはないと思う<sup>(21)</sup>」

と答えた。しかし言葉とは裏腹に、打ち続く母国のテロと軍国主義の昂ぶりに言い知れぬ不安を感じぬ筈はなかった。

同日の午後、新渡戸は國務省でスチムソン國務長官と会見した。スチムソンは満州事変直後、若槻内閣の下で「事態の不拡大」を唱え、関東軍の暴走

を押さえようとする幣原外交に強い期待を寄せて満州の成行きを見詰めていた。しかし10月11日若槻内閣が崩壊し幣原外交が終焉、12月28日関東軍が錦州へ侵出、1月3日同地を占領するに及んで、1月7日、日本の満州での軍事行動の不承認を表明する「スチムソンドクトリン」を発表したのだった。スチムソンは、満州での関東軍の動き、日本の政治の動向、日本国内での軍国主義世論の抬頭をほぼ正確に把握していた。彼は6月1日の日記に次のように記している。

1932年6月1日 水曜日

午後、ニトベ博士来訪。長時間、彼と日本の軍部について話し合う。“Poor old Nitobe” お気の毒なニトベ老人は昨冬、日本の軍国主義者は、中国の謀反将軍と同じように日本にとって危険であると言明したため、軍部の指導者たちに謝罪するという、屈辱的立場におかれたのである。

.....

ニトベ博士は言った。日本の自由主義思想の流れは、今は口も開けず、何を言うこともできないが、やがてヒステリーの嵐がすぎれば、遅かれ早かれ再び息をふきかえすであろうと。

また彼は率直に言った。満州はいずれ、三千万の中国人が、外部の征服者による同化策に対して、被征服者が常に示すのと同じ頑強さをみせることは疑う余地のないことだと<sup>(22)</sup>。

スチムソンは“Poor old Nitobe”と表現して、新渡戸が今置かれている苦しい状況を良く理解していた。現実主義者スチムソンを前にして、新渡戸は通りいっぺんの外交辞令の挨拶で済ます訳にはゆかなかった。彼は日本のファッション化の中で「日本の自由主義思想の流れは、今は口も開けず何を言うこともできない」状態であることを認めた。そしてこの3月に独立した満州国も今は大人しくしているけれども、「三千万の中国人が、外部の征服者による同化策に対して、被征服者が常に示すのと同じ頑強さをみせることは

疑う余地のないことだ」と率直に告げた。新渡戸は独立した満州国が実は関東軍の作り上げた完全な傀儡政権にすぎないことを知っていた。彼は心中では、三千万の満州国国民がいずれ外部の征服者（関東軍及び軍国主義日本）の同化策に反対して、傀儡政権を見限って独立の気運を強めるだろうと予想していた。しかし新渡戸は言論の自由なアメリカでも、かかる本音を公の場で表明することは出来なかった。彼が1ヶ月半前、「奉国の一念」をもって日本を後にしたのは「外国の誤解を解く事」就中アメリカの誤解を解くことによって日本を弁護することであった。しかし彼が弁護しようとする日本は軍国主義国家、ファシズムへの途を歩む日本であった。彼の仕事は困難な仕事であった。彼が自分に決めた役回りは満州事変を、そして上海事変を弁護することであった。そしてそれは結局、軍国主義日本を、日本の大陸侵略を弁護することに他ならなかった。スチムソンと会見した二日後の6月3日の「アメリカで学びつつあること」に「集团的良心」と題する次のような文章をのせている。

#### 451 集团的良心

32・6・3

“運命”とよぶにせよ、使命とよぶにせよ、われわれは、われわれのものでない強い力、即ちわれわれを推し動かす力、われわれがコントロールできないと思われる衝動の働きをみとめる。良心すらその力の命令に合わせねばならぬ。廉直この上ない人々、疑いなき人格の持ち主が、心から己が国の罪を非難しながらも、それを他の国々の犯した罪よりは軽いと大目に見るのはそれゆえである。愛国心は、国民すべてを偽善者とする。集团的良心はわれわれすべてを老いぼれにし、頓馬にする<sup>(23)</sup>。

彼は言う。「愛国心は、国民すべてを偽善者とする。」そしてこの愛国心の故に、「廉直この上ない人々、疑いなき人格の持ち主が、心から己が国の罪を非難しながらも、それを他の国々の犯した罪よりは軽いと大目に見る」よ

うになるのだと。「廉直この上ない」「疑いなき人格の持主」である新渡戸は、アメリカで母国の弁護活動をするに際して、愛国心故に自ら陥り易い、即ち己が国の罪を他国の罪よりも軽く見る過ちを自覚していたようにも思える。彼は自らの良心を愛国心の命令の下に従わせたのである。しかしそれは彼が述べているように、彼自身が「偽善者」になることに他ならなかった。

## 7. 軍国主義の弁護

新渡戸は在米中3回、CBSラジオでアメリカ国民に呼び掛けた。第1回目は5月8日、「日本と国際連盟と不戦条約」、第2回目は5月20日、「日本の希望と恐れ」、そして3回目は8月20日、「日本と不戦条約——不戦条約に関するスチムソン氏の覚え書きに対する日本側の反応を中心に——」であった。最後の放送は、満州事変を不戦条約——ケロッグ・ブリアン条約——に違反した日本の侵略であるとして非難したスチムソン国務長官の放送に反論を加えたものであった。新渡戸はこの演説の中で、(1) 満州事変は自己防衛の手段としてなされたものであって侵略ではない。従って不戦条約を侵犯しているとするスチムソンの非難は当たらない、(2) 満州国は一般的に考えられているように日本の傀儡政権ではない、(3) 日本のリベラル達が当初反対であった満州事変に賛成していったのは、スチムソン宣言のような「海外からの脅威」があったからである、と次のように述べた。

### (1)

「日本は、不戦条約の侵害者と呼ばれることに、深い悲しみを覚えている。日本は、同条約の規定内で行動してきた、と主張する。日本は非平和的手段に訴えたが、それは、『国家政策の手段として』ではなくて、自己防衛の手段としてであった<sup>(24)</sup>。」

「日本はもちろん、最悪の場合に備えなければならない。日本は、世界の巨大な三つの国家、すなわち中国、ロシア、アメリカと面と向かいながら、孤立している小さな国である。日本は、自らの生存権を守るために孤



立しているが、それは、しばしば申し立てられるような外部征服のためではなく、創造主から与えられた生命の保持のためである。日本のこの勇氣に対して、ささやかな信用くらい与えてくれてもよからう<sup>(25)</sup>。」

(2)

「9月18日の事件のあとで、中国政府要人が脱出したことから起こった満州地区での突然の行政・軍事両面の業務中止——から、あたかも満州国が日本軍の単なる傀儡国家であるかのような印象を一般には与えている<sup>(26)</sup>。」

「満州国が日本の援助で設立されたことは、誰も否定しない。新しい国々が他の国々の援助を受けて設立されることは、世界では、ありふれた経験である。パナマの例〔1903年独立時に米国の援助〕は、忘れ去るにはあまりにも最近の出来事である。外モンゴル共和国〔モンゴル人民共和国、1924年成立、ソ連の衛星国第1号〕が生まれてから、まだ10年も経っていない。もし、人が中国の南京国民政府の設立に至る経過を研究してみれば、そこには、物・心両面にわたってのロシアの援助があったことに気づくであろう。こうした事例はすべて、不戦条約によって世界に新しい統治形式が発表される前に起こった出来事であったのだ、という議論がある。それでは、その新しい制度の実現では、新国家の誕生に際し、いかなる“産婆”の助力も求めるべきではない、と記されているか？<sup>(27)</sup>」

(3)

「確かに、日本国全体の中には、中世的な右翼から極端な左翼に至るあらゆる種類の意見がある。しかし、外部世界からの脅威や脅威の動きがみられると、国内の異なった意見は、すべて一つの緊密なナショナリズムに融合されるのである。したがって、現在の中国との紛糾問題は、もし当事者二国間にその解決が任せられていたら、日本における自由主義思想が、もっとはるかに大きな影響力を発揮していたことであろう、第三者の干渉

があったために、混乱状態は一層悪化して行った。特にその干渉に脅迫の影がついていた時は、なおさらそうであった。日本のリベラル（自由主義者）たちは、満州での軍事行動に賛成ではなかったが、海外からの脅威が及んできたとき、彼らは自国の名誉を守るために、その脅威と立ち向かい、同じ日本人として、軍人との間にある些細な争いをやめたのであった<sup>(28)</sup>。」

新渡戸の目には、スチムソン宣言は第三者の干渉であり、それは結局日清戦争後の「三国干渉」と同じ性格のものである、と映じていた。それは満州事変の結果、日本帝国主義が大陸に得た権益を侵すものに他ならなかった。そして、もし「スチムソン氏の方策が推進されれば、結局は満州をロシアに提供してしまう」ことになるとロシアの脅威をアメリカ国民に警告することによってこの演説を終える。

「中国の救済は、中国の対日協力にかかっている。日本の将来は、中国の将来と深く結びついている。日中両国民を結ぶものは、他でもないこの満州である。いまのように満州が弱体化し、無秩序の状態のままであるならば、いずれ、この地域はボルシェビキ・ロシアの好個の“餌食”となってしまうだろう。私は、スチムソン氏の方策が推進されれば、結局は満州をロシアに提供してしまうことになり、この極東地域に、絶え間ない紛争の拠点を作り出すことになるのを、心から恐れるものである。したがって、われわれは、人類の名において、もう少し忍耐を重ねて、不戦条約を研究・運用し、現実に対して実際の適用できるものにしようではないか。そして、新しい管理体制が、この極東の地と、ひいては世界に恒久の平和をもたらすものとなるように、努力しようではないか<sup>(29)</sup>。」

この放送で新渡戸は完璧なる日本軍国主義のイデオログの役を演じている。満州事変はまぎれもない関東軍の謀略と侵略であり、「自己防衛の手

段」などではなかった。新渡戸の否定する「国家政策の手段」であり、「外部征服」以外の何物でもなかった。どのように考えても「創造主から与えられた生命の保持のため」とは言えなかった。又、満州国はまぎれもない関東軍に操られた傀儡国家であった。パナマと同列に置いて弁護出来る筋のものではなかった。新渡戸は「日本のリベラルたちは、満州での軍事行動に賛成ではなかったが、海外からの脅威が及んできたとき、彼らは自国の名誉を守るために、その脅威と立ち向かい、同じ日本人として、軍人との間にある些細な争いをやめた」と、自分達の軍国主義弁護の理由を「海外からの脅威」に置いて自己弁護している。しかしこの主張も完全なる責任転嫁の論法である。むしろ新渡戸についていえば、「外部からの脅威」ではなく、「脅威の影」のついた「内部からの脅威」によって自らの考えを変えたのではなかったか？ 又、日本のリベラル達は、新渡戸の言っているように、「眼をえぐり出される」ことによって軍部に従属させられたのではなかったか？ 新渡戸の日本弁護の放送演説は、レトリックから見ればほぼ完璧に近い出来のものであった。しかしここでは彼が満州事変勃発時、編集余録に述べた次の文章が思い返される。「個人であれ国家であれ、口先の言葉によって、正しい事を誤りと証明し、誤りを正しいと証明することができるとするなら、それは大まちがいである。宣伝はしばしば、黒をしばらく白と見えさせる力を持っていることが多い。しかし、現実と真実は断固たる真理であって、これは、雄弁によってどれほど損われあいまいにされようと、いかなる言葉も永遠にこれを変えることはできない。」新渡戸は言う。「愛国心は、すべての国民を偽善者とする。集团的良心はわれわれすべてを老いぼれにし、頓馬 dotards and dullards にする。」と。彼は自らの日本弁護の空しさと愚かしさを半ば知っていた。そこには、愛国心に良心を売り渡した、悲しい「護国の鬼」と化した新渡戸が立っていた。

“Poor old Nitobe” 彼の母国は彼の弁護に値しなかった。

注

- (1) 牧野伸顕, 『牧野伸顕日記』, 中央公論社, 1990年, 439ページ。
- (2) 『新渡戸稲造全集』, 教文館, 第20巻, 1985年, 194ページ。原文は同全集第16巻, 135ページ。新渡戸の英語の文章は, 全集の翻訳を用いるが, 訳は翻訳文どおりではない。以下同じ。
- (3) 全集, 第20巻, 217ページ, 編集余録, 31・1・25 憂国 (マトリオティズム)。原文, 全集第16巻, 155ページ。
- (4) 全集, 第20巻, 347ページ。原文, 全集, 第16巻, 262～3ページ。
- (5) 全集, 第20巻, 352ページ。原文, 全集, 第16巻, 266ページ。
- (6) 全集, 第20巻, 355ページ。原文, 全集, 第16巻, 268～9ページ。新渡戸は日本がその政治, 外交において「軍事的要素が不当に優位をえる原因」, 即ち軍国主義化の途におちいり易い原因が天皇の統帥権の独立にあることを良く知っていた。彼はその原稿を満州事変勃発半月前の9月1日に脱稿した『日本—その問題と発展の諸局面』の中で次のように書いている。

「わが憲法のもう一つの特異性を述べておかねばならぬ。第11条は, 天皇は陸海軍を統帥すると規定している。天皇がこの命令を行使するのは“陸海軍大臣”を通してではなく, 陸軍参謀総長と海軍軍令部長を通してである。この後者の職務は, 内閣から独立しているから, それは直接天皇にだけ責任があり, それゆえ“閣議”の権限の外にある。ところで, “陸海軍大臣”は公職規程によると, 現役の陸海軍将官から任命しなければならない。そこで, これらの将軍が首相の頭ごしに行動するという, 時代錯誤の奇妙な習慣が起こった。内閣の文官大臣が野党の圧力を考慮するに至り, それゆえに辞職するとしても, 陸海軍大臣は, 易々してその地位に留まり, 政変に超然としていられる。わが国の政治, また時には外交において, 軍事的要素が不当な優位をえる原因としばしばなったのは, この軍人の変則的特権である。宣戦と平和締結は内閣の権限内だけれど, 陸海軍当局は, その決定に圧力をかける立場にある。それはまた陸海軍政策を作成する権限を有している。ロンドン軍縮会議の直後, 陸海軍当局の内閣に対する異常な権限の法律的側面が, 最も真剣に, 議会でも新聞でも論議された。しかしその問題は決して解決されていない。」(全集, 第18巻, 198～199ページ, 原文, 全集, 第14巻, 190～191ページ)

彼はまた「日本の資本主義は戦争の子であった」として次のように述べている。

「日本での資本主義は, その発生の跡をたどれば, 徳川時代の末期に至るが, 当時ではそれはまだほんの子葉期の植物だったのであり, それがのちに日清

## 新渡戸と軍国主義（福原）

戦争で栄養を与えられ、日露戦争で水を注がれ、世界大戦で大きく成長したのだった。日本の資本主義は戦争の子であった。」（同全集、同巻、306 ページ。原文、全集、第14巻、296 ページ）

しかし、新渡戸はこの時、この「戦争の子」が、その後どのような悲劇の途を辿るか、知る由もなかった。

- (7) (8) 高橋紘編『昭和天皇発言録大正九年～昭和六四年の真実』、小学館、1989年、36、37 ページ。
- (9) 全集、第20巻、393～4 ページ。原文、全集、第16巻、299 ページ。
- (10) 内川永一郎、『晩年の稲造』、岩手日報社、1983年、139～140 ページ。関子英雄「松山事件で苦悩した新渡戸博士——『憂国の思い』通ぜず暗黒の時代へ——」、『新渡戸稲造研究』、(財)新渡戸基金、第5号、98～99 ページ。
- (11) 内川永一郎氏は『晩年の稲造』の中で、新渡戸の「満州事変については、われらの態度は当然のことと思う」という発言の論拠として以下のように説明している。しかしこれでは新渡戸が関東軍の板垣や石原の謀略を「当然のこと」と思っていたことになってしまう。

「満州事変は昭和6年9月18日の柳条溝事件を発火点とすることは一般的な認識である。工作者として板垣征四郎、石原莞爾らが登場したことは既に紹介したが、柳条溝事件が起こるまでに万宝山事件と中村大尉事件が発生している。万宝山事件は昭和6年5月24日、中国側の地主、長春公安局の武装巡警隊が万宝山上に土地を借りて耕作していた朝鮮人農夫を逮捕し、撤退を要求した事件である。これを聞いた朝鮮人が激怒して今度は逆に在鮮華僑を襲い、死傷者が出る事態に発展したかと思うと、これに対抗して中国側は大がかりな排日運動を起こす連鎖反応を起こした。

中村大尉事件は6月27日に起きた。参謀本部・大尉中村震太郎は従者3人とともに公用で東蒙洮索地方を旅行しているとき、東北軍興安屯墾第3団兵にスパイの容疑を受けて逮捕され、即日銃殺された事件である。中村震太郎は国際法上の手続きをとって旅行していた。以上は関東軍が軍事行動に走る導火線になった二つの事件のあらましであるが、稲造はこれを認識し、満州事変はなにも日本だけが悪いのではないと考えていたといえよう。」

（内川、前掲書、140 ページ）

蝦名賢造氏は『新渡戸稲造』、新評論、1986年、の中で、内川氏と同じように、万宝山事件と中村大尉事件をとりあげ、「これらの事件が関東軍が直接軍事行動に走る導火線となった二つの事件のあらましであるが、新渡戸は表面的にはこれらのことを考え、満州事変はなにも日本だけが悪いのではないと認識していたのだろうか。また新渡戸が満州問題について従来から持ち続け

てきた認識と関わり合いのなかで、これらの点をどのように認識すべきであろうか。」と述べている。(前掲書, 255 ページ)

しかし蝦名氏自身は、御自分の説明を十分説得的だと思っていないように思える。

松下菊人氏は『国際人新渡戸稲造』, ニューカレント インターナショナル, 1987年, の中で、「彼(新渡戸—福原)は満州事変が勃発した1931年9月頃まで、厳しい軍部批判を展開したのと対照的に、翌年1月頃の文章には、明らかに満州での日本軍の行動を認め支持する態度が見られる」(同書, 137 ページ)としているが、その根拠を明らかにしていない。

- (12) 内川, 前掲書, 151 ページ。
- (13) 森容・力子「新渡戸稲造先生と盲天外森恒太郎」, 全集, 別巻2, 77～8 ページ。
- (14) 事件のその後の顛末は内川, 前掲書 152～162 ページ, 及び図子, 前掲論文。
- (15) 松隈俊子, 『新渡戸稲造』, みすず書房, 1985年, 247～8 ページ。
- (16) 彼はアメリカ説得旅行から帰った1933年5月の『改造』に「米国の対日態度に就て」を執筆した。その中で訪米の意図を次のように説明している。

「実は昨年の4月突然渡米したに就ては、内外に於て奇怪なる風評も立って、米国のみならず、欧州の種々なる新聞、雑誌等に於ても我輩が自国に在て、或方面の怨みを受け、身体にさへ危害を加へられ、亡命の為米国に逃げ出したといふ評判が大分広く行渡って居た。斯の如き批評は一応尤もな事である。如何となれば1922年此方10年に渡って其間10回余、内外各種の団体より丁重なる招待を受けたに關らず、一度として之に応ずる事無く、又2, 3回ジュネーブと東京の間の往復せしも殊更米国經由を避けて印度洋を航海した如きは、在米の友人の眼に頗る奇怪に映じたのは当然の事である。そして彼等の間に常に答へて排日移民法案の行はるゝ間は二度と米国の土地を踏まぬと明言して居たのである。然るに先年の春突如として渡米の途に就たのは右の事情を知る者には甚だ矛盾に思はれたのは無理ならぬ事である。然らば何故に我輩が此矛盾を敢て為したか。

満州事変突発してより程なく、我輩は上海に開かれた太平洋問題調査会に出席した。其頃は未だ満州事件の真相が明かならずして、出席外国人の中には事の理由と、経過に就て殆んど一定の議論も無かったが、大体日本の対支政策が不穏当であるが如き意見を抱いて居ったものが半以上であった。然るに上海附近の支那人の生活状態に實際触れた者は、之を救ふべき道無きを知って、日本の態度には相当の理由があると悟った者も少くなかった。理論としては強硬に過ぎたといふ非難もあったと同時に、兵力に訴へざれば到底日

支間の問題は解決出来ぬと論じた現実論者も相当にあった。」（全集、第4巻、454ページ）

しかし具体的動機はいまひとつハッキリ述べていない。この文章を敷衍して考えれば、「満州事件の真想」をアメリカ国民に説明するため、ということになるが、その主張自体、満州事件は正しく、アメリカ国民はそれを誤解しているという前提に立っている。

マリーは、1936年6月、新渡戸がアメリカで行なった講演集『日本文化の講義』を出版するに際し、その序文で、新渡戸の訪米の意図を次のように説明している。

「1932年に、彼の国、日本を米国民のために正しく解説するという任務を帯びた夫とともに、私がアメリカへ向けて出航した時は、日本にとっても、私たち個人にとっても、真に暗黒の時代であった。アメリカは、思想面で私たちに敵対した。米国の友人たちの中にさえ、しばしば、私たちの真意を理解しない人たちがいたのだった。多くのアメリカ人は、新渡戸が、彼としては決して是認できなかった事柄のために宣伝者になり、主唱者になってやって来た、と思った。——このような役割を彼が果たすことなど、決してなかったし、また果たすはずもなかったのに……。」（全集、第19巻、5ページ）

しかしこの説明自体が、1936年という時代の発言であることを考慮しなければならない。

新渡戸稲造の弟子である矢内原忠雄は「余の尊敬する人物」の中で、1932年4月の新渡戸渡米の事情について次のように述べている。

「先生が、移民法は未だ修正せられざるのみか、満州事変以来対日感情の一層悪化した米国に向かって、自分から出かけて行く決心をしたのは、よくよくの事であったに相違ありません。世間の誤解や批難はまだ忍ぶことが出来るとしても、自分の良心を偽ることは新渡戸博士には出来ません。それならばどうして先生は自己の屈辱を忍んで渡米したのでありませうか。」（『矢内原忠雄全集』、第24巻、162ページ）

「而して日本の大陸発展の歴史的必然性を説き、米国人が感情に走らずして（先生は人々が感情に走らずして）常識と理性とを以って歴史の客観的認識を為すよう啓蒙的努力を傾けました。先生は弁護し得ざる事を曲げて弁護したのではありません。ただ物事にはかういふ見方もあるといふことを説いて、米国人の感情的誤解を除きうるだけ除かうと努力したのです。」（同全集、同巻、163ページ）（原文は初版本、戦後版は括弧を付した如くに変更されている）

新渡戸研究者の中には矢内原のような認識を持つ人が多い。しかしこれでは新渡戸の歴史の実像が見えて来ない。従って新渡戸の本当の苦悩も、又その

悲劇の真の姿も見えて来ない。矢内原自身が「日本の大陸発展の歴史的必然性」の部分で戦後カットとしていること自体に、弟子としての新渡戸弁護の意図が感じられる。新渡戸の悲劇は「自分の良心を偽り」、「弁護し得ざる事を弁護した」ところにあったのではないか。

又矢内原は「人及び愛国者としての新渡戸先生」の中で「先生が国家問題に就いて一番大きな難儀をうけられたのは、亡くなられる四、五年前、満州事変の初まった時に、愛媛県松山での講演で舌禍を招かれた時である」（同全集、693ページ）とされているが、正しく言えばあれは「舌禍」ではなく新渡戸は「本当のことを言ってしまった」のである。そして「松山事件」の起こったのは、正確には上海事変勃発直後の1932年2月、亡くなる1年8ヶ月前である。矢内原はまた「齢七十になった先生、移民法修正を見る迄二度と行かぬと憤慨された先生が、何の故にアメリカに行かれたか、自分はその御心境が解るやうに思ふのである。日米間の平和が危機に瀕して居る。無用の誤解によって事実が曲解され間違った事が伝ってはならぬと、批難や危険を承知で行かれたのだと思ふ。」（同全集、同巻、695ページ）と言っている。こう考える研究者は戦後でも多いが、これでは満州事変や上海事変は正当な行為であり、その誤解を解く為に新渡戸がアメリカに行ったことになる。矢内原の認識は戦前、軍国主義下での弟子の学者の認識である。

- (17) 全集、第20巻、460ページ。原文、全集第16巻、348ページ。
- (18) 全集、第20巻、460～461ページ。原文、全集第16巻、349ページ
- (19) 全集、第20巻、462～463ページ。原文、全集第16巻、350ページ。
- (20) (21) 『英文大阪毎日』寄稿文、「日本の碩学フーヴァー大統領に会見—新渡戸博士ホワイthouse訪問記（1932・6・4）」、全集、第22巻、185ページ。
- (22) 『アメリカの新渡戸稲造「太平洋の橋」取材記』佐々木篁 熊谷印刷出版部 1985年、168～169ページ。
- (23) 全集、第20巻、483ページ。原文、全集、第16巻、366ページ。
- (24) このCBS放送の録音は残されていないが、1932年新渡戸がカリフォルニア大学で行なった約20回の連続講義に使われ、その草稿が残されていた。全集、第19巻、304ページ。原文は全集、第15巻、248ページ。
- (25) 全集、同巻、307ページ。原文、同全集、同巻、251ページ。
- (26) 全集、同巻、306ページ。原文、同全集、同巻、250ページ。
- (27) 全集、同巻、305ページ。原文、同全集、同巻、249ページ。
- (28) 全集、同巻、304ページ。原文、同全集、同巻、248ページ。
- (29) 全集、同巻、309ページ。原文、同全集、同巻、252ページ。



## 新渡戸と軍国主義（福原）

（本稿の執筆に当たっては British Columbia 大学 Asian Library の権並恒治氏との会話から多くの示唆を得ている。）

（本論文は平成 12 年度駒澤大学特別研究助成金の援助を受けて作成されたものである。）